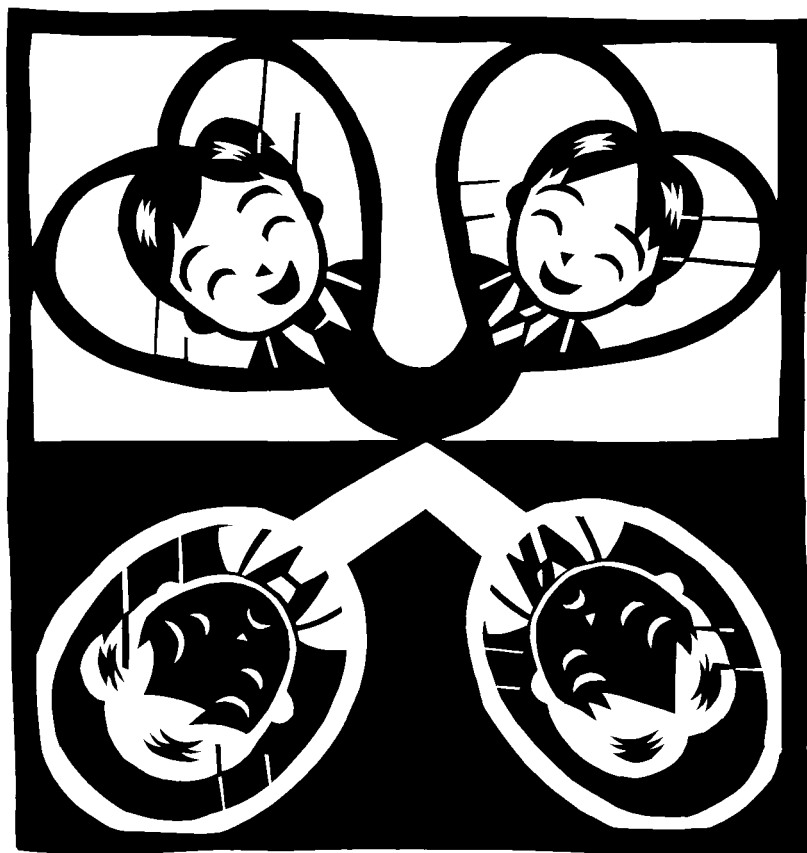


苦手な人こそ“恩人”



私たちは日常生活の中

で、さまざまな人間関係に悩み苦

しむことがあります。そつしたとき私

たちは、相手の欠点を責め、不平不満を

募らせることが少なくありません。

今年号の『ニューモラル』では、会社

員の青年の体験を通して、人間関係の

悩みから抜け出すヒントを探って

みたいと思います。

教育係を引き受ける

堀田徳夫さん(27歳)は、建設会社に勤

める営業マン。入社五年目の今は、上司

から「頼むぞ」と仕事を任せられること

も多くなり、仕事が目白くなってきました。

今年の三月中旬のこと、上司から「新





入社員が入ってくるから、その教育係になってほしい」と頼まりました。そのとき堀田さんは、自分が入社した当初のことを思い出しました。

「見ることに聞くこと、すべてが初めてのことばかりで戸惑い、上司からの指示なしでは何もできなかった。でも、挨拶だけはしっかりとしよう」と毎日元気に大きな声を出していたなあ」

そんなことを懐かしく思い浮かべながら、一方で、「俺でいいのか？ 教育係って、いったい何をどのように教えていけばいいんだろうか」という不安もありました。新入社員の教育係という新たな役割を与えられ、堀田さんは期待と戸惑いを感じていました。

消え入るような声に……

四月中旬、半月の研修生活を終え、堀田さんの職場に新人の加藤一樹さんが配属されました。優しそうな顔立ちの青年です。

営業部全体の顔合わせの後、上司から加藤さんを紹介されると、堀田さんはささず挨拶をしました。

「いつしよに仕事をさせてもらおう堀田です。どうぞよろしく！」

「あ、加藤です。どうぞよろしくお願います……」

「なんだ、少し元気がないなあ。大丈夫かな？」

消え入るような加藤さんの返事に、堀田さんは内心、不安を覚ええました。

翌日から堀田さんは、張り切つて加藤さんに仕事の「いろは」を教えていきます。そして、五年前に自分が先輩から教わつたように、懇切丁寧に一つ一つの仕事を教えていきました。

ところが、二、三週間すると、要領を得ない加藤さんに対して、イライラする気持ちがあわき起こってくるのを感じてきました。特に、加藤さんの電話対応の際に声が小さいことは気になってしかたがありません。堀田さんは、たびたび注意し

ました。加藤さんはそのたびに「はい」と返事をするものの、なかなか直りません。

「加藤くん、返事だけじゃなく、行動に表してくれなくちゃ困るよ」

「すみません……」

“こんな調子じゃ、先が思いやられるな”
小さくなっている加藤さんの様子を見ながら、堀田さんは、ため息が出てくるのでした。これからも毎日、顔を合わせると思うと少し憂鬱になります。

通じない思い

一か月ほど過ぎたある日、堀田さんは、加藤さんの電話でのやり取りを隣で聞いて、電話が終わるなり、強い口調で注意しました。

「何度言ったら分かるんだ！ そんな挨拶の仕方じゃ、取引先に逃げられるぞ！」

「そんなこと、分かっています！」

普段は消え入るような声で、「はい。すみません……」と言うだけの加藤さんが、口応えをしました。

「分かっているなら、なぜ改めようとしていないんだ！ 口応えはいいから、きちんとし……」

堀田さんが言い終わらないうちに、加

藤さんは席を立ってどこかへ行ってしまう。
「なんだ、あいつ……」

堀田さんはやり場の無い思いを抱えながら、仕事に戻りました。

しばらくして加藤さんが「さつきはすみませんでした」と戻ってきましたが、堀田さんの気持ちは収まりません。いっしょに仕事をしながらも、ギクシヤクシタままその日を終えました。

夜、自宅に戻っても、堀田さんは職場での加藤さんとの出来事が気になってしかたがありません。

「少しきつく言い過ぎたかな。でも、一人前に育ってもらうには、あのくらい言っておかないと。もしかすると、加藤くんと自分は根本的に相性が合わないの

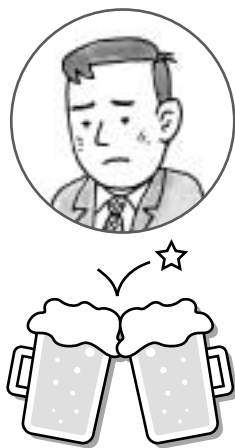
かもしれない」

考えれば考えるほど、堀田さんの気分は暗く落ち込んでいくのでした。

一か月後



恩師の悩み



そんなおり、堀田さんは大学時代のゼミのOB会に出席しました。会場では、同期の懐かしい顔とともに、恩師の三輪先生の元気な姿に会うことができました。

乾杯のあと、同期生たちと集まり、お互いに近況報告をしながら、仕事や友人のことを話し合いました。お酒が入ったことも手伝って、学生時代を思い出し軽口を叩き合う堀田さんたちのテーブル

に、三輪先生が笑顔で加わりました。

「やあ、みんな。元気そうだね。君たちは卒業して何年になるかな」

「五年になります」

「そうか、もう五年も経つかね。早いもんだね。みんな仕事が忙しいんだろうな。これだから充実した仕事のできる年になってくるはずだ」

三輪先生がそう声をかけるやいなや、堀田さんは「実は、先生、聞いてもらいたいことが……」と、加藤さんとの一件を話し始めました。

初めて後輩の指導を任せられ、一生懸命に教えているにもかかわらず、相手が自分の思ったように応えてくれないこと、また、自分と後輩は性が合わないのではないかといった悩みなど、堀田さんの話



を聞き終えると、三輪先生はゆつくりと次のように話し始めました。

「堀田くんもいろいろと大変なようだね。しかし、それも君が成長するうえで大切

な出会いだと考えてみたらどうか。

知つてのとおり、私は大学で教える前に、しばらく高校の教師をしていたんだ。教師という職業上、いろいろな生徒と顔を合わせるわけだけれど、若いころ一度だけ、どうしても苦手な生徒がいてね。そのときは苦労したものだよ」

「え、三輪先生にも苦手な生徒がいたんですか？」

いつも温厚おんこうで笑顔を絶たやさない三輪先生は、学生が質問や相談に訪れても嫌いやな顔一つせず、誰だれに対しても親身しんみになつて受け答えをしてくれる先生で、学生の間でも評判でした。そんな三輪先生にも苦手な生徒がいたことは、意外いがいに感じられました。

「担任たんじんとなったクラスにSくんという生

徒がいたんだけれど、反抗的はんかうてきでいつも問題を起こす生徒だった。私は、何とか彼を指導したいと思って心を配り、努力したんだが、とにかく相性が悪いというか、まったくそりが合わない生徒だった。

それまでの私は、〃苦手な生徒なんかいない〃って思っていたんだけれども、彼との関係にはいつも頭を悩ましていた。

数か月が過ぎたころ、Sくんがクラスで暴行事件ぼうこうじけんを起こし、相手が怪我けがをして入院する騒ぎさわぎとなった。幸い怪我は軽くてすんだけれど、そのとき私は、〃なんということをしてくれたんだ。Sさえないなければ……〃と思い悩んで、そのことを先輩教師に相談したんだ。

すると、まったく予想に反した答えが返ってきたんだよ」



「Sくんは
大恩人だよ」

「どんな答えだったんですか」

思わず堀田さんは声を出しました。その場にいる同級生も身を乗り出して聞いています。

「そのとき先輩は、『Sくんは、君にとって大恩人だよ』って言ったんだ。いつも悩みの種の生徒が大恩人なんて、私にはその意味が分からずキョトンとしていると、先輩はこうアドバイスしてくれた。」

『君はSくんに、何とか健全な青年に育ってほしいと思つて、担任として、教師として、これまで一生懸命に努力してきたんだよね。しかし、その君の願いがSくんにはなかなか届かない。』

でもね、見方を変えれば、Sくんがいるからこそ、立派な青年に育つてほしい」という君の生徒に対する愛情が引き出されている。さらに言えば、その愛情が届かないということは、まだまだ君の愛情が足りないことや教師として不十分な点、未熟な点があることを、Sくん自身が身をもつて教えてくれているとは考えられないか。

そう考えれば、Sくんは君の大恩人なんだよ。だから、決して逃げてはいけな
い、真正面から彼と向き合つていくんだ



ぞ』ってね。

私はこれまで「彼のほうが悪い」という思いがいつもあった。しかし、この先輩のアドバイスで、これまでのSくんと
の接し方を振り返り、Sくんに対する思
いが一変してしまった。

翌日からは、Sくんと顔を合わせると、



「彼は私の大恩人なんだ」という思いを
込めて、こちらから努めて温かい声をか
けるようにしたんだ。初めは彼の対応も
まったく冷たいものだったけれど、それ
でも毎日声をかけることをやめなかつ
た。そのうちに、彼に対する苦手な気持
ち、硬くて冷たい心が薄紙を剥ぐよう
に、私の心の中で薄れていったんだよ。
卒業式が終わると、Sくんが誰よりも
早く私のところへ挨拶に来てくれた。実
に嬉しかったよ」

三輪先生は、にこやかな表情で堀田さ
んたちに語りました。

「苦手な人を恩人と思う……か」

堀田さんにとつては、思いもしなかつ
たアドバイスでしたが、何か心のもやも
やが晴れたような気がしたのです。

長所に目を向ける

堀田さんは自宅へ戻る道すがら、これまでの出来事を振り返りました。三輪先生が言うように、「苦手な人は恩人」だと考えると、堀田さんは、これまで考えもしなかつたような新たな視点が、次々と思い浮かんでくるのでした。

——教育係を任ざれて、その期待に応えようとしていたが、それは自分がよく見られたいだけではなかつたか。

——相性が合わないとい決め付けることは、うまくいかないことを相手のせいにして逃げているだけではないか。

——一方的に自分のやり方を押し付け

て、相手を変えようとしていただけではなかつたか。

——相手の性格や特性をどこまで理解し把握していただろうか。

——短所ばかりに目がいき、彼が本来持つている長所を見ていなかつたんじゃないだろうか。

——これからは、加藤くんの意見にもっと耳を傾け、彼の長所にもっと目を向けてみよう。

堀田さんは、自分の不十分さや未熟さに気づかされるとともに、何かこれからの展望が見えてきたような気がしました。

それはまた、堀田さんが人間的な成長への新たなステップを歩み始めた瞬間しゅんかんでもありました。



◇ 「加藤くん、おはよう」 ◇

月曜日、堀田さんは、入社すると一番先に自分から加藤さんに笑顔で挨拶をしました。加藤さんは、朝にもかかわらず、相変わらず元気のない返事でしたが、これまでと違って堀田さんはいつこうに気にはしません。それどころか、加藤さんに笑顔を投げ返すのでした。

「私もこれまで君に不十分な対応ばかりして申し訳なかった。でも、これからは違うよ。いつしよに成長していけるようお互いがんばろう」

堀田さんは、心の中でそうつぶやきました。すると不思議なもので、加藤さんの顔が少しほころんで笑顔を向けてくれたように感じたのでした。

自己を高める逆転の発想

私たちは、相手に対して不愉快な思いや嫌な感情を抱くときがあります。そのときの思いや感情をよく考えてみると、自分が気づかないうちに抑圧している自分自身の思いや感情を相手の中に見いだして、相手を批判していることが多いのです。これを心理学では「投影」と言います。つまり、嫌いだと感じる相手の性格は、実は自分の性格の一面である場合が多いのです。「人は自分の鏡」と言われる所以も、実はこういうところにあるのかもしれません。

私たちは、自分にとって都合が悪いことが起こると、その原因を相手や周囲の

せいにしがちです。そして相手に対して不平や不満を訴え、心で責めます。特に、人間関係においては、それが顕著に現れます。

しかし、相手は「自分を映す鏡」だととらえると、自分の不十分さや未熟さ、反省すべき点などを、誰よりもよく教えてくれる存在であると受け止めることができるのではないのでしょうか。

人間関係は、感情的なもつれなどもあり、冷静に受け止めることは難しいかもしれませんが、しかし、今ある問題の原因は、相手だけでなく自分にもあるのではないかと考え直してみることで、問題の

本当の姿をとらえることができます。そして、そうした反省する心が、人間的な成長をよりいつそうもたらしてくれると言えるでしょう。

私たちは、物事が順調に進んでいるとき、自分の行動や考えを見直し反省することはありません。しかし、悩みや葛藤を感じたときこそ、自分を省み、自分を

磨くチャンスであり、自分の成長のための新たな一歩を踏み出すチャンスなのだととらえることが大切です。

「苦手な人は、自分の心を磨き高めてくれる恩人である」という考え方は、私たちの人間関係をより豊かにし、自分自身を高める「逆転の発想」と言えるのではないのでしょうか。

